

福島敏夫随筆集『乙戸南雑話「花鳥風月および星・虹月および星・虹を愛でながら」

主宰論説 54

3 つの河川：黒部川、筑後川、天竜川

日本の川で、3 大急流で知られるのは、最上川、富士川、球磨川、だったと思われる。また、流域面積での 3 大河川は、利根川（坂東太郎）、筑後川（筑紫次郎）、吉野川（四国三郎）だったと思われる。また、長さの 3 大河川は、信濃川、利根川、石狩川だったと思われる。しかし、ここで取り扱うのは、私の半生において深い関わりがあった 3 つの川（これらの川は、暴れ川としても知られ、先人らが、その治水に苦慮したが、現在は、ダムや遊水池や放水路の設置等が、功を奏して、穏やかな清流として、川縁りの散策等を楽しめるようである。）をとりあげてその景勝、それに関わる逸話、名所・旧跡として訪れた思い出話等について、まとめておきたいと思い、ここで述べるものである。

1) 黒部川：

黒部川は、私が育った富山県黒部市の黒部扇状地を形成する 48ヶ瀬の源流となり、立山連峰と後立山連峰の間の十字峡から源を発し、黒部峡谷を流れ下る、急流であり、名流でもある。黒部川第4ダムや宇奈月ダム等により、治水も進んだが、今も、流域の峡谷では、熊も出没する人跡未踏の地も多い。宇奈月からのトロッキ電車として知られる黒部川峡谷鉄道は、夏から秋に向けての紅葉と絶景を楽しめ、貴重な山岳観光の基になっている。この黒部川は、過去に、何度も洪水と氾濫を繰り返し、暴れ川の代名詞となっていたようである。黒部川の上流から黒部扇状地が開ける付け根部分に、愛本があり、舟見、入善町方面に行く道と、三日市、魚津市方面に向かう道の分岐点となっていた。『大蛇伝説』もあり、川を渡るのも大変だったようだが、今は、橋も架かり、自由な往来が可能になっている。昔、俳聖松尾芭蕉が、「奥の細道」の旅の途中、このあたりを通ったが、よほど旅の難儀を感じたのか、「黒部48ヶ瀬とかや」という短かい文章しか残さずに通り過ぎたと言うのも、宜なるかなと思われる。それでも、文学史的には、寂しい思いもして、学生時代に、『我が故郷黒部を讃える詩一編』を作っていたのが、懐しく思い出される。

2) 筑後川

筑後川は、利根川、吉野川とともに、日本の3大暴れ川のひとつであり、熊本・大分・福岡・佐賀の4県を流れる九州最大の1級河川である。その源を、阿蘇の外輪山付近（熊本県阿蘇郡瀬の本高原）に発し、高峻な山岳地帯を流下して、日田市において、九重連山から流れ下る玖珠川を合わせ、典型的な山間盆地を流下する。やがて夜明峡谷を過ぎ、佐田川、小石川原、巨瀬川及び宝満川等多くの支川を合わせながら、肥沃な筑紫平野を貫流し、早津江川を分派して有明海に注ぐ。幹川流路延長は143キロメートル、流域面積は2,860平方キロメートルに達する、日本有数の大河である。多くの恵みと猛威の源となり、また、古来、洪水と氾濫による水害が、近隣の悩みの種であり、治水に苦慮した歴史的背景があるようだ。4つの国・県にまたがるため、軍事的要衝として、徳川幕府は、橋を架けることを禁じたという。現在は、大小多数の橋が架けられ、交通上の要衝になっているようだ（ウィキペディア日本語版による）。昔、太宰府の旧遺跡を訪れたとき、水城とこの筑後川を関連させて、『学問と葛藤』をテーマに詩を作ったこともあった。懐かしく思い出される。

3) 天竜川

天竜川も、暴れ川として、度々洪水と氾濫を起こしたが、金原明善らの先人の努力により、治水が進み（金原治山・治水記念博物館が、浜松市内にあり、その足跡を理解するのに役立つようである、その流域は、風光明媚で知られている。昔、エコマテリアル・プロジェクトの化学分科会の有力メンバーだった静岡大学工学部教授上野先生（今は、故人）の計らい

で、天竜川流域の木造振興記念会館（別の名前だったかもしれない）で、分科会が開催され、杉 義弘岐阜大学工学部精密化学科教授（当時）、黒柳 卓浜松市振興技術顧問（当時）（今は、故人）、松崎武彦化学技術研究所主任研究員（当時）（今は、故人）らともに、訪れたことがある。高分子のリサイクル技術関連 が、分科会のテーマとなっていた。当時、真面目な人は、その解決策の研究に取り組んだ。昨今、使用済みプラスチックの適正処置の重要性や、マイクロプラスチック問題等が噴出する中で、先見の明のあった人達だったと、今新たに、偲ばれる。

平成2026年6月25日微修正